

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.89 (March 31, 2020)

第89号 2020年3月31日

例会発表要旨

10月例会 2019年10月19日 青山学院大学 青山キャンパス

① 現代ジャマイカ都市部の葬送についての予備調査報告

神本 秀爾(久留米大学)

本発表では、ジャマイカ都市部の葬送に関する現地予備調査(2019年9月5日から14日)で得られた成果について報告した。主な対象はアフリカ系住民であり、調査は首都キングストンおよび旧首都スパニッシュ・タウンでおこなった。本調査を実施する背景となったのは、21世紀に入りひとつのトレンドになった「派手葬」について、黒人性の変化という点からの考察が必要だと考えられたためである。

本発表では、第一に「宗教のあり方の変化」について、第二に「埋葬空間の変化」について、第三に「葬送業の浸透」について手短かにまとめた。第一の点については、アフリカ系住民のキリスト教化と習合(クレオール化)、その後のペンテコステ派の流行といった歴史を確認した。第二の点については、奴隷制期にはプランテーションや屋敷の片隅・周辺でおこなわれていた埋葬が、奴隷解放後に賃金労働者が集中した都市部では公営墓地へと中心が移り、1970年代後半以降は郊外の広大な私営墓地へと移っている流れを確認した。第三の点については、21世紀以降都市部で爆発的に葬儀業者数が増加しており、費用の高額化や不十分な質しかそなえていない業者による問題が起きていることを紹介した。

本発表では予備的な分析にとどまったが、①全体的な傾向として墓地のデザインや葬儀ディレクターへの教育を通じて北米の影響が強まっていること、②公営墓地や個人の私有地での一部の墓石の個性化(個人を想起させるモチーフを用いること)の進展は、故人らしい死を演出する「派手葬」と同時並行的な傾向であることを主張した。これらの変化を、たとえば Deborah Thomas によるジャマイカの黒人性に関する議論と結び付けて理解していくことが、直近の課題である。

② キャサリン・ダナムと土方巽:トランス・パシフィックな「黒さ」の移動と変容

有光 道生(慶應義塾大学)

舞踏はいまや世界中で演じられるようになった戦後日本発の前衛的なパフォーマンスである。舞踏家の数だけ舞踏のスタイルがあるといわれるほどまでにその定義自体が曖昧化・多様化した現在、いまだに多くの作品に共通した特徴としてあげられるのは、全身白塗りの踊り手たちが痙攣するかのように舞台をのたうち回る姿だ。だが、舞踏初期では白塗りは行われず、むしろ黒塗りがスタンダードであった。本発表では、この忘れられた「黒い舞踏」誕生の文化的な背景と意義を探った。土方巽が1959年に『禁色』の公演を行ったことが舞踏の始まりとされるが、その2年前にアフリカ系アメリカ人の振付家・ダンサーであり、さらに文化人類学者でもあったキャサリン・ダナムの来日公演が行われた。ダナムはみずからのフィールド・ワークをもとにアフロ・カリビアン身体文化と西洋のモダン・ダンスを融合させ、舞台や映画で人気を博していた。そのダナムの日本ツアーはテレビで全国放送までされたが、西洋のバレエやモダン・ダンスとは異なった美学・哲学を模索していた当時の土方に深い衝撃を与えることになる。本発表では、舞踏が「(白人の)西洋」vs「日本」という二項対立的な図式では説明できない「黒さ」を媒介としたハイブリッドでトランス・ナショナルなパフォーマンスとして登場したことの意義、そしてそれが忘却されてきたことの問題点を指摘する一方で、ダナムが公演後に日本で一年間の静養をしつつ、民謡を蒐集し、その後のパフォーマンスに取り入れたことの意味合いについて分析した。

③ “Reading 1926”—ドイツ、メキシコ、「ハーレム」よりみる黒人民衆とプロパガンダ

深瀬 有希子(実践女子大学)

1920年代半ばには、多様な人種・民族・ジェンダー集団で、それぞれに固有の「終わり」と「始まり」の感覚が生まれた。本報告ではまず、その感覚が、Toni Morrisonの小説『ジャズ』(1992)における「新聞を読む」という行為にいかにか反映しているのかを確認した。その後は、1926年を定点としつつ、「ニュー・ニグロ」を提唱したAlain Lockeがかかわった、公式なあるいは個人的な会合をいくつか迎えることにより、黒人民衆の「ふさわしい」表象をめぐる知識人や芸術家たちの駆け引きを考察した。例えば1907年に、ロックがオックスフォード大学留学中に経験した、ささやかなしかし明らかに人種差別主義的なお茶会こそ、その参加者であったホレス・カレンの文化多元主義なる概念が生み出された現場であった。時が進み1924年には、ハーレム・ルネサンスのおよそほとんどの主要人物が参加した人種民族混淆の大パーティーが開催された。ロックの「ニュー・ニグロ」の思想は、ドイツ人画家Winold Reissのイラストレーションが横溢する*Survey Graphic—Harlem, Mecca of the New Negro*(1925)の発行とともに成熟した。しかし、1920年代後半から1930年代初頭のある日、ワシントンDCの黒人街にあるうら寂しい地下レストランで、デュボイスと求職中のロックは食事をともにした。その文字通りの対面は、ふたりの知識人がそれぞれに20年代半ばに理論化した「黒人芸術の基準」が、プロパガンダと芸術という二項対立では語りえないものであることを、彼ら自身が振り返る契機となったのではないか。ハーレム・ルネサンスとメキシコの関係についてはさらなる調査が必要であり、フロアよりご指摘いただいた先行研究の熟読を進めていきたい。

① Toni Morrison の *Paradise* におけるモノの物語—意味が重ね書きされる“Oven”を手がかりとして

長尾 麻由季(大阪大学・院)

本発表では、Graham Harman が *Tool-Being: Heidegger and the Metaphysics of Objects* (2002) において説明する“tool-being”を参考に、Toni Morrison の第7作 *Paradise* (1997) における Oven を分析し、人間によって設定された使用目的から離れ、廃れていく中で、Oven の意味や機能が拡散されていくさまを考察した。

Paradise における Oven は、物語の中でその意味や機能を変容させており、決して固定化された役割にとどまらない。拒絶を経験した旧父祖 (the Old Fathers) が建立した町 Haven において、Oven は当初、料理や洗礼のために使用され、共同体の連帯を強める働きを担っていた。“[T]he huge, flawlessly designed Oven that both nourished them and monumentalized what they had done.” (7) と描写されるように、Oven は Morgan 家らの祖先の栄光や歴史の象徴だった。

ところが、Oven が解体され、新父祖 (the New Fathers) が築いた町 Ruby において再構築されると、かつての意味や機能が失われるようになる。Oven は共同体の人々が集う場として機能なくなり、代わりに若者のたまり場となって、周りにごみが散乱するようになる。周囲に人々が集まるどころか、近くで遊ぼうとする子供たちが追い払われたり、「修道院」襲撃の計画が立てられたりすることで、Oven は拒絶や暴力を生み出す場と化す。つまり、Oven は黒人たちが築き上げた楽園の象徴であったにもかかわらず、その楽園が生まれた背景にある排他性を皮肉にも再生産してしまうのだ。

また、Morgan 家の祖先が後世に伝承すべく Oven に刻み込んだ言葉は、その意図に反して世代間の乖離を露呈させ、共同体を分離させる機能を持つ。Oven に書かれた言葉の解釈が登場人物によって分かれたり、こぶしの落書きが加えられたりすることによって、Oven の意味が重ね書きされる。Oven は人間によって定められた目的に基づいて使用される道具としてではなく、それ自体が作用や意味を持ち、人間に影響を与えていく存在物として描かれている。

② ハーストンの初期劇に窺える人間解放の視点とその戦略—*Meet the Mama* (1925)、*Color Struck* (1926)、*Spears* (1926)、*The First One* (1927) の考察を通して—

光森 幸子(広島修道大学)

Zora Neale Hurston の戯曲は最近になって注目されてきたものの、小説と比較すると研究が十分に深まっているとは言い難い。しかし作家となった当初から最晩年まで戯曲を発表し続けたという事実に鑑みるなら、彼女が小説だけではなく演劇にも、黒人自身の表現や黒人文化をアメリカ社会に伝播する有効性を認めていたのは確かである。それゆえ、ハーストンの戯曲に光を当てることはハーストン文学に新たな可能性を切り開く意味でも重要であり、またそれらを 1920 年代、民俗学的な視点を心得て作品が洗練されていったとされる 1930 年代、

また劇作家としての円熟期に入った1940年代に分けて考察することには、ハーストン自身の思想の深化と発展を考察するうえで一層の価値があるように思える。

そこで本発表では、まず1920年代の、アメリカ南部でのフィールドワーク以前の戯曲 *Meet the Mama*, *Color Struck*, *Spears* と、その最中の *The First One* に注目し、ハーストンが当時人気を博していた舞台演出の手法を模倣しつつも、次第に黒人の内面描写に傾倒していった様子を辿った。また、同時代の黒人作家、特に黒人運動の指導者として当時強い影響力を持っていた Du Bois の戯曲との比較や、ハーストン自身の評論 “Characteristics of Negro Expression” を引用しながら、黒人の社会的地位向上を目指す政治的プロパガンダから乖離していった点、さらには各々の作品中の女性登場人物の役割を連続的に眺めることにより、人間解放に対する、ハーストンの瑞々しい感性の萌芽を確認した。

③ フレデリック・ダグラスにとっての「私的生活」——家族・親族関係からの考察

朴 珣英(金城学院大学)

フレデリック・ダグラスは生涯を通して、戦略的に演説、自伝、写真を用いて「理想の黒人市民」としての自己像の「永遠化」を試みてきた。その一方で、ダグラスは「私的生活」については語ることは少なかった。本発表では、その語られることの少ない「私的生活」、とりわけダグラスにおける結婚の意味、家族・親族との関係を探ることで、理想的な公的人物としてのダグラス像とは異なる側面の分析を試みた。

最初の妻、アンナ・マレー・ダグラスとの結婚によって築かれた家庭は、「黒人は責任をもって家庭を維持することはできない」といった人種主義に基づくステレオタイプと闘うことを余儀なくされた。本来は私的領域であるはずの家庭が、「公的な場」としての役割を担っていたのである。「最も有名な黒人家族」として、彼らの家庭は社会的に「尊敬に値する黒人市民」像の構築に寄与するものでなければならなかったのである。

また、自伝などでは語られない家族・親族間における諸問題—ダグラスの「女性関係」、子どもたちとその家族の不祥事、メリーランドの親族の粗野な振る舞い、ダグラスの精神状態など—は、「偉大な人物」の人間らしい側面のみならず、マイノリティに属する個人が社会的地位を得ても、それが代代的に継承されることが困難な社会経済的問題をも明らかにするのである。

ダグラスにとっての「私的生活」は、黒人解放運動において戦略的に「語り得なかった」と言える。

会員からの投稿

資料調査報告—ニューヨーク、ボストンを歩いて

猪熊 慶祐(立命館大学・院)

振り返ってみれば、2019年度は非常に充実した年度であったように思う。なんといっても所属大学の研究費を活用し、資料調査として2度の渡米をすることができた。ニューヨークに3週間、ハーバード大学のあるケンブリッジに2週間と、合計約5週間滞在したわけだから、大学院生という身分を考えれば比較的長期間といってもいい。(かつては「住んでいた」ので、正直物足りなさを感じるの否めないが…)基本的には、日本で研究室に籠っているのとさほど生活リズム自体は変わらない。ただ、大きく違うのは、街を思う存分歩き回り、リーディング・ルームで150年以上も前の本やプレイビルなどに直に触れるということだ。目の前に出される資料を開くと、この上なく興奮する。まさに、一世紀半の時を隔てて過去と繋がったような感覚である。

博士課程に入って minstrel・ショー研究をし始めたのは、修士の時のハーレム・ルネサンス研究がきっかけとなった。パフォーマンスに関心があった私は、文学作品に描かれる 1920年代に流行した黒人キャストのミュージカルやヴォードヴィルコメディなどが、「実際はどのようなものだったのだろうか？」そして、舞台上の俳優の「黒塗りの顔やジョークのルーツは一体どこにあるのだろうか？」という疑問を抱くようになった。minstrel・ショーについての教科書的な知識は持っていたし、その影響ということも、ある程度は理解はしていた。だが、私の疑問が解消されることはなかった。19世紀に流行した時のパフォーマンスが具体的内容を教えてくれるものは、ほとんどなかったといってもいいからだ。黒人が蔑まれる芸能、確かにその要素はある。しかし、それだけなのか。それだけで大流行するものなのだろうか。なにせ、黒人も入場できた娯楽なのだから。

黒塗りの芸能者が歌をうたい、踊りを踊り、ジョークを飛ばす。これが minstrel・ショーを説明する際に頻繁に使われる表現である。しかし、どんな歌や曲が披露され、どんなジョークが言われていたのか、もっと言えばショーそのもののルーツなど、詳細を知っているようで実は知らないことが多い娯楽産業でもある。もちろん学術の世界で、その一部は議論されてきたが、それはまだまだごく一部でしかないと感じている。

そのような疑問を少しでも解消するため、夏に、ニューヨークを訪れた。およそ 15年ぶりのマンハッタンは懐かしい反面、「ずいぶんと変わったな」という印象だった。ポロポロのタクシーが減り、新しい車体が導入され、街自体がきれいになったように感じられた。なによりも街中で見かけるホームレスの人たちの数が減っていたように思える。実際に昔撮影した写真と比べてみても、15年で街が整備されたのがよく分かった。その反面、「いったい社会的弱者はどこにその身を移したのだろうか？」と、考えながら調査の目的地である図書館へ歩を進めていた。

公立図書館を拠点にして minstrel・ショーの脚本の収集と 19世紀の移民に関する調査を中心に行ってきた。図書館の Wi-Fi につなぐと、データ化された脚本にアクセスできる。150年以上も前の紙媒体のため保存状態が良くないものはすぐにデータ化して残す。海外の

この対応の早さにはいつも感心させられる。状態が良ければ直に見られるものもあったのだろうが、今回は全てデータ化されたものばかりだった。

いずれもごくごく短い脚本だが、目を通すと19世紀のニューヨークが垣間見える。大量の移民が流入しつづけ、ボストンなどを大きく引き離して大西洋岸随一の大都市となったニューヨーク。奴隷制をめぐる国が動いていたことを考えると、黒人と白人の人種問題にどうしても目を向けがちになる。だがヨーロッパを中心に大量の人々が押し寄せたニューヨークでは、もう少し複雑に絡みあった微妙な力関係が人々の間に存在したはずである。もちろん人種による差別がなかったわけではない。それでも、あまりにも多様な背景を持つ人々が集う街では、事情はそう単純なことではなかろう。それを知るには実際に残された紙の資料に触れるの一番なのかもしれないが、それだけだと私は、どうも立体的にイメージができない。そういうときは街を歩いて観て回った。夏の日差しの中、一人かつて劇場が集まったバワリーやローワー・イースト・サイドを歩き回って、街の様子をカメラに収めるということをした。写真を撮っているのが現代の街の様子であっても、ある程度歴史的な情報が頭の中に入っていると、かつての街並みなどを想像しやすくなるのだから不思議なものである。想像上の街並みなど十人十色。それでも歩くことで、私なりの19世紀のニューヨークが頭の中にできあがっていった。

移民が大量に押し寄せた頃のマンハッタンの生活をより生々しく感じとれたのは、テナメント・ミュージアムへ足を運んだ時のことだ。ここはテナメントの見学を通して移民の生活について学ぶことができる格好の場所で、ガイドの説明に加えて、部屋の間取りから家具、衣類までも目にする事ができる。私は、ミンストレル・ショーに数多くのアイルランド移民が関わったこともあり、彼らに関するツアーに参加した。訪れたのはまだ蒸し暑さの残る8月後半、しかも土砂降りの雨の日であった。テナメントの部屋の中には扇風機やサーキュレーターが設置され、暑さ対策がおこなわれていたが、それらが無い場所ではたまらなく蒸し暑い。暑さが大の苦手な私にはかなり堪えた。だが、この悪条件が、研究にはむしろ都合が良かった。なぜなら、悪天候だからこそ、移民たちが強いられてきた厳しい生活・住環境に近い状況を体感できる。現代のように便利な道具などない時代、あの気温と湿度であれば、肉体的な負担は増すばかりだ。もちろん悪天候が続くわけではないだろうが、身体的な苦痛に加えて天候の変化があっては、気分の浮き沈みが大きく精神的にも穏やかに日々を過ごすことは難しかったのではないだろうか。「住めば都」といっても、容易に適応できる住環境とはいいがたい。(少なくともテナメントは私の都にはならなそうだ。)アイルランドからの移民に限らず、同時代にテナメントに居を構えた人々は少なからず似たような生活を強いられたはずである。ミンストレル・ショーが本拠地としたのは、そんな街だ。当時の似たような境遇の人々は、劇場へ足を運び、お金を払ってでも笑いたかったのかもしれない。3週間の滞在で、そのような考えに至った。

2度目の渡航は、コロナウイルスが各地で騒がれ始めた2月。ハーバード大学と公立図書館の資料を調査するために、ボストンとケンブリッジを訪れた。あらゆるものが徒歩圏内の比較的狭いエリアに、全米最古の大学ハーバードをはじめMITなど米屈指の高等教育機関を複数有し、さらには各国から、医療・製薬関連企業の研究者らが派遣されてくる。ニューヨークの華やかさとはまた異なる魅力を持つ街でもある。元来、歩いて街を様々な角度から眺めるのが好きな私は、ニューヨーク同様に晴れた日は、もちろん徒歩で宿から大学や公共図書館へと向かった。今年のボストンは例年にないほど暖かい日が続いたので、滞在期間は平均して日に8キロほどは歩いて移動した。地下鉄も使っているから、移動距離だけを考えるとかなりなものだ。大学までの道のりで沢山の壁画を見つけ、道草食ったこともあった。対岸の

ボストンでは、ノースエンドでカンノーリを買い、食べながら図書館まで歩くこともするなど、移動中はちょっとした観光気分を味わっていた。

アメリカの都会は、教会など古い様式の建築物の傍に高層ビルが立ち並ぶのをよく目にする。それがなぜか調和しているから不思議である。アメリカという国の持つ雰囲気があるのさ。景観条例に縛られた京都市街では、アメリカのような調和は見られない。その土地の自然環境や住人、生活様式など様々な要因によって街に合う、合わないが生じるからだろう。ボストンは街として魅力的な反面、歩いてみると、ニューヨーク以上に露骨に現れる格差にやるせなさを感じることもあった。

さて、調査に関して言えば、正直なところ2週間では短すぎた。予想していたことではあるが、諸々のスケジュール上仕方がない。限られた時間で作業効率を最大化するという時間との勝負であった。調査初日、大学のリーディング・ルームで届けられた箱の中を見て少しがっかり。ボックス内容の詳細から予想した資料とは違っていた。アーカイブ調査ではよくあることなので、大学の資料はそれほど時間もかけずに見終え、公立図書館で移民の歴史や政治、フェニアン・ブラザーフッドに関する二次文献を中心にあたることにした。二次資料とはいえ、日本国内の図書館などでは全くといっていいほど手に入らないものばかり。渡米前からある程度の目星をつけていたので、納得いく調査結果を得ることができた。19世紀に移民が関わった政治運動となるとタマニーなどがすぐに浮かぶが、その他の活動にも目を向けると、また新たなアメリカ社会が顔を出す。いつの時代も一言で、「〇〇な／の時代」などと表現することは不可能なのだが、19世紀はその代表的な時代の一つといえる。様々なことが目まぐるしく動いた時代ゆえ、数多の出来事を整理しながら社会を立体的に理解していくには、国外にも目を向けなければならない。気が遠くなりそうでもあるが、それが19世紀アメリカを研究する醍醐味の一つである気がしている。しかし、調べているうちについ欲が出て、あれもこれもとになってしまうのが私の悪い癖。今となってはまだ見たりないという気持ちでいっぱいである。

アーカイブでは必要な資料だけ写真に収めていたので、時間を見つけてキャンパス向かいにあるスターボックスで写した資料を読み込む作業を繰り返した。緊張感漂うリーディング・ルームで、「静かにコツコツ」というのもいいが、カフェのような雑踏の中でボツンと一人になれる環境も悪くはない。特に周りに気を使う必要もなく、「あーだ、こーだ」とぶつぶつ言いながらノートにメモやら何やら書いたり、考えたりするには、カフェはうってつけの場所だ。そんなことをしていると大抵は変わった人に思われるのがオチだが、時々学生から「何の勉強？」と聞かれたり、観光客から「学生かい？」などと話しかけられたりして、会話が弾むのもカフェという空間ならではの。ニューヨークよりも多少周囲の人との距離が近く感じられた。そんなちょっとした会話から巡りめぐって、「ボストン日本人研究者交流会」で発表を聞く機会にも恵まれ、ボストンに暮らす友人と一緒に出掛けた。内容自体は、大衆文化やパフォーマンス研究の分野とは異なり、建築デザインに関する発表と飲料の「甘味」に関する発表の2本だった。だが、どちらの発表も「大衆」をキーワードにする私にとっては、非常に興味深い内容であった。詳しい内容は紙面の都合上書けないが、珍しく私の方から発表者に議論を持ちかけていた。

今年度の2回の渡航は、実に濃く充実していた。海外調査に出かける度に調査内容以外の様々なことにも目を向けて、あれやこれやと手あたり次第に好きなことをやってしまうので、1日の時間が非常に長く感じられる。一方で、最終日はあっという間に来ってしまうという不思議な感覚を覚える。普段とは違う時間感覚になるのは、有り難いことに一日いちにちが充実しているからかもしれない。このような贅沢な調査がおこなえたのは本当に多くの方々にお世話になったからだ、つくづく思う。そういった方々に私ができる恩返しは、今回の調査を活か

して研究論文にまとめることだろう。そのためにも、日々精進していく次第である。



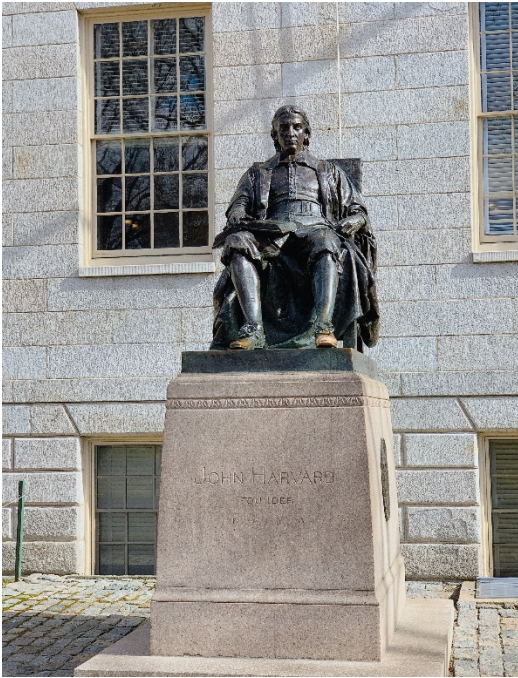
① かつての歓楽街、パワリーの一角。



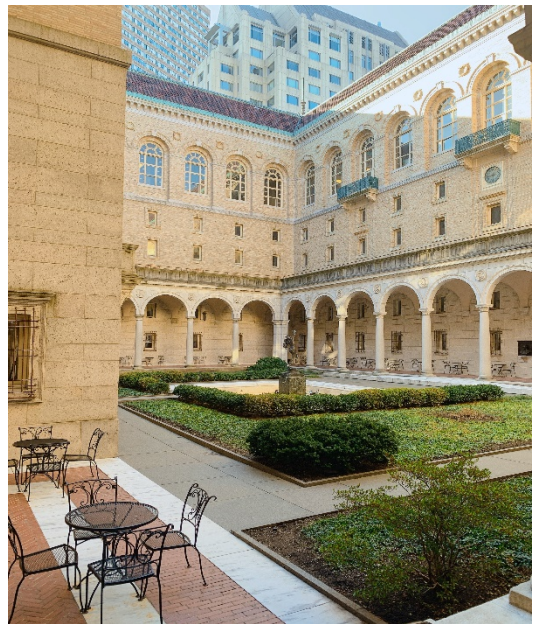
② ションバーグ近くにある Big L 追悼壁画。



③ ニューヨークのリトル・イタリー、ボストンのノースエンドといえば、カンノーリ。映画『ゴッド・ファーザー』にも登場する。



④ ハーバード大学といえば、
John Harvard の像。



⑤ ボストン公共図書館の中庭。



⑥ MIT の Great Dome。

入 会 者

氏名：伊東 えり子(いとう えりこ)

所属：青山学院大学博士後期課程一年

自己紹介：博士前期課程から主にアフリカン・アメリカン文学を研究しており、修士論文ではゾラ・ニール・ハーストンの作品における主体について論じました。暫く科目等履修生として研究を続けておりましたが、改めてトニ・モリスンの作品について系統的に研究したいと考え同大学院博士後期課程に進みました。モリスン作品における多義的に使われる key words に着目しながら、トラウマについて考察しております。これから黒人研究学会に積極的に参加し、より一層知見を深めるよう勉強させて頂きたいと思っております。ご指導のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

氏名：程 文清(てい ぶんせい)

所属：帝京大学外国語学部、専門分野 比較文明学(立教大学)、アメリカ文学(中京大学)

自己紹介文：約 20 年前、名古屋の中京大学大学院在学中に、風呂本惇子先生のご紹介で入会しました。月例会や、全国大会、会報の投稿にも積極的に参加させていただき、大変勉強になりました。その後、関東地方に引っ越してから、仕事が忙しくなり、徐々に学会から足が遠ざかりました。昨年、本学会の全国大会に、久しぶりに参加し、そこで見た活発な研究活動や、海外の学者との交流に刺激を受け、再入会して自分の研究をもう一回見つめ直してみようという思いに至りました。

最近の研究論文：

「旅の表象 - マシーの場合」『新たなるトニ・モリスン—その小説世界を拓く』風呂本惇子他編、金星堂、2017 年、159-176 頁

「地下鉄に乗って逃げて—コルソン・ホワイトヘッドの作品における移動の表象」『エスニシティと物語り—複眼の文学論』松本昇監修、金星堂、2019 年、34-36 頁

氏名：小林 俊一郎(こばやし しゅんいちろう)

所属：一橋大学言語社会研究科修士課程

自己紹介文：ポール・ド・マンら由来の言語批判的ともいえる方法でアフリカ系アメリカ文学を読み、主体編制的な制度でもある文学の内在的不安定性を逆用しながら人種・ジェンダー・階級など例示される社会的カテゴリーの闘を問い直すことが主要な関心です。文学研究が専門ですが社会思想や社会運動にも関心があり最近ではカリフォルニア大学での院生労働者の大量解雇と続くブラック・スタディーズら諸学科と各大学人の対抗ストライキに鼓舞されながらも不安な心持ちで関心を寄せつつ法と権利の問題への文学や芸術の貢献の潜在可能性を思索しています。

(順不同)

退 会 者

氏名：安澤 梨花（あんざわ りか）

報 告

会員による出版

神本秀爾・岡本圭史編著、『マルチグラフトー人類学的感性を移植する』、集広舎、2020年2月、312pp.

編集後記にかえて

8月の初めに作家、トニ・モリスンが逝去された。88号を発行した直後、この編集後記で触れることをすっかり忘れていたことに気付いた。改めてこの号で、私のモリスンの思い出をほんの少しだけ振り返ってみたいと思う。

はじめて読んだのは、『青い眼がほしい』。それも中学2、3年生の頃だったと記憶している。ブラックミュージックが好きだった私に、ALTが薦めてくれたのがきっかけだった。バスケットボールと音楽に夢中だった私には、翻訳とはいえ難解で、大筋くらいしか分からなかったのを覚えている。それから何年も経った後、『青い眼がほしい』で学部の卒業論文を書くことになる。その時も読めたかといえば、恥ずかしい話だが、読めていなかった。それ以降、積極的に作品を読んだ。『タール・ベイビー』を読んでいたときなど、自分の周辺に起きた出来事とあまりにも似通っていて、不思議な感覚を覚えた。大学院のゼミで、『ジャズ』がテキストだった時、毎回クラスに活気が溢れていたことを覚えている。モリスンの作品は、いつ読んでも難解で、それでいて面白い。個人的に一言で表現するなら、これに尽きる気がする。それは、テキストが幾通りにも解釈が可能だからだろう。またそれが、モリスン文学を含む文学作品を読む醍醐味なのかもしれない。

モリスンに限らず、まだ出会っていないだけで、そういった作品や作家は他にもまだまだある／いるはずである。いや、もしかしたら既にどこかで出会っているのかもしれない。そう思うと、つつい仕事を忘れて書棚に手が伸びる。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsumei.ac.jp
ホーム・ページアドレス
<https://kmmstshuji.wixsite.com/jbsa>